

7.

学術成果の発信

- 1) 学術雑誌『ジェンダー研究』
- 2) プロジェクト報告書
IGS Project Series

1) 学術雑誌『ジェンダー研究』

国内外の執筆者による最新のジェンダー研究の成果を世界に発信



本研究所が編集・発行している査読付きの国際学術雑誌で、特集論文、特別寄稿論文、投稿論文、書評から構成される。巻頭に掲載される特集論文はその年に特に注目されたジェンダー関連のテーマについて世界第1級のジェンダー学研究者が執筆し、外部評価を得た論文で組まれており、学術研究としての寄与も大きい。特別寄稿論文は、編集部によるオリジナル企画として、学際的・国際的なジェンダー研究の成果を世に問う論文を掲載している。投稿論文は、国内外から投稿された日本語もしくは英語の論文で、国際的に活躍する研究者による外部審査を経て採用された質の高い論文である。書評も近年ジェンダー関連分野で注目された著書をジェンダー研究および隣接分野の研究者が評しており、最新のジェンダー研究の動向を示すものである。

■『ジェンダー研究』24号（2021年7月刊行）概要

特集「パンデミックとジェンダー」

『ジェンダー研究』24号は、「パンデミックとジェンダー」と題する特集を組み、すべての論文を公募により募集した。また今回は、現在進行形の事象を取り扱うことから幅広い研究分野からの投稿を期待して、通常の「研究論文」の他に、「研究ノート」「資料報告」「現場報告／事例報告」というカテゴリーを新たに設けることとした。厳正な審査の結果、研究論文2本、研究ノート3本、そして現場報告／事例報告3本を掲載している。

研究論文1本目の金井論文は、COVID-19（新型コロナウイルス感染症）が生命保険営業の現場にもたらしたジェンダー格差を調査から明らかにする。金井によれば地域に密着し対面での営業を重視する女性労働者よりもITを駆使し営業地域を限定しない男性の営業の方が、物理的距離が重視される状況においては営業成績を上げているという。金井は、従来の保険営業の担い手が男性稼働モデルを補完する主婦を想定し、「専門性」よりも女性が構築する人間関係に営業を依存していたこと、また男女労働者間にデジタル格差があること、といった諸要因を指摘し、パンデミック下で対面を重視する「生保レディ」の構造的脆弱性を明らかにした。2本目の本山論文は、グローバル・ガバナンスが直面する危機の性質について、フェミニスト国際政治経済学の視点から言説分析をおこなっている。エッセンシャルワークの名のもとに再生産労働に焦点が当たった今般のパンデミックでは、ケアの社会的必要性がこれまでのフェミニスト知の蓄積により広範囲に認識される一方で、「ケア」をどこまでの射程において捉えるか、また市場経済との関係性をどのように概念化するか、新自由主義との関連において差異が見られることを示す。パンデミックとジェンダーに関するあらゆる言説が、グローバル政治経済体制を変容、維持、再生産させるジェンダー化された統治権力と関わっていることを明らかにする論考である。

そのほかにも、BLM運動の視点から問い直す公共彫刻（内山）、COVID-19がドイツのジェンダー施策に与える影響（佐野）、パンデミックを契機に「ホーム」という空間を再考する論文（倉光）、パンデミックをマニラの都市下層女性がどのように生き延びたか、生き生きと記述した報告（小ヶ谷・モラレス）、日本のシングルマザーへの大規模調査からコロナ禍がもたらした影響を明らかにした報告（五十嵐／石本）、そして北京でパンデミックを経験した医師たちの経験をつづった報告（大友）が特集として掲載された。この未曾有の危機にいかに対応すべきなのか、ジェンダー研究、フェミニズムの視点だからこそ明らかにできる、またそれを多角的に問う素晴らしい特集になったと自負している。

続く一般投稿論文のセクションでは、5本を掲載することができた。いずれも厳正な審査を経て掲載可となったもので、後掲の目次から明らかなように、セクシュアリティ、表象、教育、心理といった幅広い分野からの掲載となった。注目すべきは藤高論文で、本学へのトランス女性受け入れ発表を機に表出した、日本の「フェミニスト」によるトランス・フォビア言説に焦点を当て、その背後にある「ポストフェミニズムとしてのトランス」という認識論的枠組みを明らかにしている。現在のフェミニズムが抱える課題を浮き彫りにし、トランス・インクルーシブなフェミニズムの構築を訴える力作である。

また書評は、林美子、高橋麻美、山根純佳、小川真理子、田間泰子、児玉谷レミ、小勝禮子、佐藤智美、大野恵理、具裕珍、徐阿貴の諸氏によって評された11本の書評を収録した。いずれも人文科学・社会科学の幅広いフェミニズム、ジェンダー研究の先端をいく文献を厳選し、寄稿いただいた。

今号も多彩な執筆陣によって最先端のジェンダー研究の知見が提供される1冊となった。

『ジェンダー研究』24号(2021年7月刊行)目次

巻頭言	申琪榮
特集：パンデミックとジェンダー	
研究論文	
コロナ禍の生命保険営業における「対面」営業の変化	金井郁
危機としてのコロナ・パンデミックとフェミニスト知	本山央子
研究ノート	
カラ・ウォーカーによる《フォンス・アメリカス》(2019)—パンデミック下のイギリスにおけるBLM運動の視点から ...	内山尚子
COVID-19がジェンダー施策に与える影響—ドイツの男女平等戦略を巡る現状報告	佐野敦子
COVID-19と「ホーム」—フェミニスト地理学の視点から	倉光ミナ子
現場報告／事例報告	
パンデミックを生き延びる	
—マニラ首都圏都市底辺層女性のロックダウン下の日常生活経験から	小ヶ谷千穂／ロレイン・モラレス
コロナ禍のシングルマザー調査プロジェクト—1800人の実態調査から見えてきたこと	五十嵐光／石本めぐみ
パンデミック期の北京で生きる医師たちの日常	大友聡
投稿論文	
「Xジェンダーであること」の自己呈示—親とパートナーへのカミングアウトをめぐる語りから	武内今日子
腐女子の「ファンタジー・トラブル」—身体・欲望・妄想をめぐるBLファンタジーの存在論	張瑋容
女性発達障害児者を支援者はどのような対象として考えているのか	
—支援者に残るジェンダーバイアスとその再生産	向井理菜
若者の性の問題化の構造—保健体育科教科書における性感染症の記述を例に	反橋一憲
ポストフェミニズムとしてのトランス?—千田有紀「女」の境界線を引きなおす」を読み解く	藤高和輝
書評	
ケイト・マン著, 小川芳範訳, 慶應義塾大学出版会	
『ひれふせ、女たち ミソジニーの理論』	林美子
Koikari Mire 著, Bloomsbury Academic.	
<i>Gender, Culture, and Disaster in Post-3.11 Japan</i>	高橋麻美
ジョアン・C・トロント著, 岡野八代訳・著, 白澤社発行/現代書館発売	
『ケアするのは誰か?新しい民主主義のかたちへ』	山根純佳
戒能民江/堀千鶴子著, 信山社	
『婦人保護事業から女性支援法へ—困難に直面する女性を支える』	小川真理子
小浜正子著, 京都大学学術出版会	
『一人っ子政策と中国社会』	田間泰子
シンシア・エンロー著, 佐藤文香監訳, 岩波書店	
『〈家父長制〉は無敵じゃない 日常からさぐるフェミニストの国際政治』	児玉谷レミ
中嶋泉著, ブリュッケ	
『アンチ・アクション 日本戦後絵画と女性画家』	小勝禮子
跡部千慧著, 六花出版	
『戦後女性教員史 日教組婦人部の労働権確立運動と産休・育休の制度化過程』	佐藤智美
Cynthia J. Cranford 著, Cornell University Press.	
<i>Home Care Fault Lines Understanding Tensions and Creating Alliances</i> ,	大野恵理
鈴木彩加著, 人文書院	
『女性たちの保守運動 右傾化する日本社会のジェンダー』	具 裕珍
熊本理抄著, 解放出版社	
『被差別部落女性の主体性形成に関する研究』	徐阿貴
編集後記	
編集方針・投稿規定	

■『ジェンダー研究』24号(2021年7月刊行)編集委員会

編集委員長

申 琪榮 お茶の水女子大学ジェンダー研究所

編集委員

天野 知香 お茶の水女子大学基幹研究院人文科学系
水野 勲 お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系
森 義仁 お茶の水女子大学基幹研究院自然・応用科学系
石丸 径一郎 お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系
大橋 史恵 お茶の水女子大学ジェンダー研究所
倉光 ミナ子 お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系
脇田 彩 お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系
板井 広明 お茶の水女子大学ジェンダー研究所 (2021年3月まで)

学外編集委員

三浦 まり 上智大学法学部
金井 郁 埼玉大学経済学部
北原 恵 大阪大学文学研究科
板井 広明 専修大学経済学部 (2021年4月から)
Jan Bardsley ノースカロライナ大学
Karen Ann Shire デュースブルグ・エッセン大学

編集事務局

平野 恵子 お茶の水女子大学ジェンダー研究所
仙波 由加里 お茶の水女子大学ジェンダー研究所
和田 容子 お茶の水女子大学ジェンダー研究所

2) プロジェクト報告書 IGS Project Series による成果刊行

ジェンダー研究所では、開催したシンポジウムやセミナーでの講演・報告内容の記録や、特別招聘教授プロジェクトの成果をまとめた報告書として、IGS Project Series を刊行している。2021年度は、6冊刊行した。以下はそのタイトル一覧。

【2021年度新刊6冊】

	<p>IGS Project Series 15 特別招聘教授 プロジェクト特集 ラウラ・ネンツィ</p>		<p>IGS Project Series 16 特別招聘教授 プロジェクト特集 アネッテ・シャート＝ザイフェルト</p>
	<p>IGS Project Series 21 2021年7月2日開催 IGS オンライン国際セミナー (生殖領域) 記録集 商業的精子バンクに関する問題</p>		<p>IGS Project Series 22 2021年7月16日開催 IGS オンライン国際セミナー (生殖領域) 記録集 生理の貧困</p>
	<p>IGS Project Series 23 2021年11月26日開催 IGS オンラインセミナー (生殖領域) 記録集 不妊と男性のセクシュアリティ</p>		<p>IGS Project Series 26 2021年8月29日開催 オンライン国際フォーラム 記録集 出自を知ることがなぜ重要なのか</p>